

大学院における日本語教師養成の課題

ー ネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違い ー

加納千恵子

1. はじめに

全国日本語教師養成協議会（2009）によれば、日本語学校などで考えられている「日本語教師の実践力」には、大きく分けて2つある。1つは授業を行うための力、スキルであり、日本語教師検定などで測定できる能力であるとされる。それは、日本語教師としての専門的能力のほか、指導能力、学習者への対応能力、フィードバック能力、パフォーマンス能力、自己育成能力、さらに授業の条件や学習者などの状況に合わせて必要な能力を総合的に活用できる力と、必要な能力を瞬時に活用できる臨機応変な対応力から構成されているとされる。もう1つは、スキルとしては捉えにくい力、授業の成立などを支える力で、いわば人間力とも呼べるものであり、教師検定などでは測定できない力であるとされる。しかし、いずれにしても、ここに見られる日本語教師の役割は、「授業を行うこと」、「学習者を指導すること」であり、従来の伝統的な教師主導型の教師観に基づいていると思われる。

それに対して、ポスト・オーデオリンガルの語学教育として登場したコミュニカティブアプローチや、正統的周辺参加理論などの立場では、教育は教師から学習者への一方向の教授作業ではなく、接触場面におけるインターアクションによる学習者の自律的学習であるとし、日本語母語話者（教師）にとっても、日本語非母語話者（学習者）にとっても、「母語話者による母語場面で使われる日本語」とは明らかに異なる「共生日本語」を共に構築していく活動であると捉えている（岡崎 2005）。こ

のような新しい教育観に立った場合、どのような教師養成が必要となるのであろうか。

才田（2007）は、東北大学文学部における日本語教育実習の目的として、「授業技術を身につけるよりはむしろ、①異文化接触の場である日本語授業を体験することによって日本語教育とはどういうものであるかを実感し、視野を拡大すること、②授業運営グループの一員として各自の置かれた場を意識しながら、自ら考えて課題を遂行し、問題点の把握・分析とその改善を行うというサイクルを通して、洞察力・思考力・行動力を養うこと、に置いている」と述べている。学部生を対象とした場合には、教師教育というより、教育現場の体験を通して、人間としての資質を高めることに重点が置かれ、教育観や教師観はそれほど明確にされてはいないようである。

一方、堀（2007）は、大学院における教育実習の現状について、「これまで多くの大学院レベルの教師養成機関が報告書を出しているが、多くの機関に留学生がいるにも拘らず、日本語母語話者と同じ視点からの実習報告がほとんど」であることを指摘し、日本語母語話者（以下、NSとする）の実習生と、非母語話者（以下、NNSとする）の実習生の意識調査を行って、両者が共存する教育実習のあり方を探っている。また、カイザー（1995）は、異文化間教育の現場としての日本語授業におけるNNS日本語教師の役割について、日本国内の場合と海外の場合とに分けて論じている。

本学の大学院人文社会科学研究所の日本語教師養成プログラム（国際地域研究専攻）においても、NNS学生の方が常にNS学生を上回っているのが現状であり、両者にどのような違いがあり、共通点があるのか、日本語教育に対するどのような見方、教師観を持っているのかなどを探ることにより、それぞれの教育目標を定める必要があるのではないかと思われる。

本稿では、筆者が国際地域研究専攻（博士課程前期）日本語教育研究

コースの学生たちに「日本語教育特講Ⅱ」の授業の中で行った、日本語教育観および日本語教師の役割観に関する調査の結果を題材に、大学院における日本語教師養成の課題について考えてみたい。このことは、今後、国際日本研究専攻（博士課程後期）の日本研究基盤領域においても、そこで行われる高度職業人としての日本語教師養成において役立つのではないかと思われる。

2. 調査の概要

本稿で取り上げるデータは、2008年度と2009年度に筆者が国際地域研究専攻日本語教育研究コースの「日本語教育特講Ⅱ」の授業中に学生たちに行ったアンケート形式の2つの調査である。

調査1は、日本語教育における教授観、教師の果たすべき役割に対する考え方をみようとするものであり、1から18までの項目について、「5. 強く同意する, 4. 同意する, 3. 同意も反対もしない, 2. 反対する, 1. 強く反対する」という5段階評定を授業時間内の10分程度を使って行ったものである。調査1の被調査者となった学生の内訳は、2008年度のNS学生4名とNNS学生4名、2009年度のNS学生6名とNNS学生12名、計26名¹⁾であった。そして次の週の授業で、その結果データを学生に自分たちの持っている教師の役割観について考えるための題材として提供し、ディスカッションを行った。

調査2は、調査1の2週間後に行ったもので、「ネイティブ教師のいいところと、ノンネイティブ教師のいいところを挙げてください。」という自由記述式のアンケート調査である。こちらは授業時間内の15分程度を使って行い、直後に学生たち自身に皆から出された意見を集計させ、発表させた。調査2の被調査者は、2008年度の「日本語教育特講Ⅱ」の受講者10名（NS5名、NNS5名）と、2009年度の受講者18名（NS6名、NNS12名）の計28名であった。

調査1に用いた質問項目は以下の通りである⁽²⁾。

【質問】日本語教師の役割として

1 から 18 までの質問を読み、5. 強く同意する、4. 同意する、3. 同意も反対もしない、
2. 反対する、1. 強く反対する、のいずれかの番号を選んでください。

- | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|
| 1. 授業中、学習者の眠りはすぐ直さなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 教師はいつも学習者が正しい発音で話すように注意しなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 学習者の意欲を継続させることがことばの学習を成功させることにつながる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 教師は授業でくわしい文法説明をする必要がある。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 外国語を教える時、その外国語が話されている国の文化も教えることが必要だ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. 外国語を学ぶことで、自分の国の文化をふり返ることができる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7. 学習者には正確さを求めなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 外国語学習の中で一番大切なのは文法の学習だ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. 学習している外国語を話す人たちと練習する機会をつくらなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 教師は学習内容に学習者が興味を持っている内容を取り入れなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. 教科書や教材は外国語の授業に必要なだ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 教科書に書いてあることは全て教えなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13. 外国語教師にはユーモアが必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. 教師はいつも学習者を励まさなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 授業ではできるだけたくさんの知識を与えなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 外国語学習は楽しくなくてはならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. 教師は学習者が達成感を持ったかどうかをいつも確認しなければならない。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18. 外国語学習では、たくさん読ませたり書かせたりすることが必要だ。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

次の3節で、調査1の結果をまとめ、日本語ネイティブの学生 (NS) 10名と、ノンネイティブの学生 (NNS) 16名の間に、考え方や意識の違いが見られたかどうかを分析する。また、ノンネイティブの学生 (NNS) の中でも比較的人数の多い中国・台湾の学生7名と、その他の NNS 学生 9名 (内訳: ウズベキスタン2名, タイ2名, モンゴル2名, ポーランド1名, インドネシア1名, 韓国1名) との間に違いが見られたかどうかについても検討する。

さらに、4節で調査2の結果についてまとめ、最後に5節で、大学院における日本語教師養成、および日本語教育研究で課題となる事柄について学生たちの日本語教育観、教師役割観などを踏まえて考察する。

3. 日本語教授観および教師の役割観の調査結果と考察

調査1の日本語教育における教授観、教師の役割観を探るための各質問項目に対する5段階評定の結果の平均値をまとめたものが表1である。

表1. 大学院学生の「日本語教育観／教師役割観」

		26人全体の 平均	NS10人 の平均		NNS16人 の平均
1	誤りはすぐ直す	3.5	3.1	<	3.75
2	正しい発音	3.27	3	<	3.44
3	学習者の意欲	4.46	4.7	>	4.31
4	文法説明	3.62	3.3	<	3.81
5	その国の文化	4.42	4.5	>	4.38
6	自分の文化	4.38	4.7	>	4.19
7	正確さ	3.54	3.2	<	3.75
8	文法の学習	2.87	2.55	<	3.06
9	人と練習する機会	4.4	4.25	<	4.5
10	興味のある内容	4.1	4.15	>	4.06
11	教科書や教材	3.92	3.7	<	4.06
12	教科書の全て	2.56	2.25	<	2.75
13	ユーモア	4.15	4.1	<	4.19
14	はげます	3.79	3.45	<	4
15	知識を与える	3.13	2.95	<	3.25
16	楽しく	4.06	3.95	<	4.13
17	達成感の確認	3.9	3.55	<	4.13
18	たくさん読む書く	3.69	3.1	<	4.06
	平均	3.76	3.58		3.88

26名の院生全体の平均評定結果を見ると、高く評価されている7項目は、評価が高い順に、以下のようになっている。

3. 学習者の意欲を持続させることがことばの学習を成功させる (4.46)
5. 外国語を教える時、その外国語が話されている国の文化も教えることが必要だ (4.42)
9. 学習している外国語を話す人たちと練習する機会をつくらなければならない (4.4)
6. 外国語を学ぶことで自国の文化をふり返ることができる (4.38)
13. 外国語教師にはユーモアが必要である (4.15)
10. 教師は学習内容に学習者が興味を持っている内容を取り入れなければならない (4.1)
16. 外国語学習は楽しくなくてはならない (4.06)

これらは、言葉の持つ文化的要素を重視し、学習者が学習そのものを楽しんだり満足感を持ったりすることが自律的学習を促進すると考える、どちらかと言えば新しい教授観・教師の役割観を支持する傾向を示すと言えるよう。

反対に、比較的評価が低いものとしては、「12. 教科書に書いてあることは全て教えなければならない (2.56)」, 「8. 外国語学習の中で一番大切なのは文法の学習だ (2.87)」があり、旧来の、教科書を絶対視するような文法中心の教育観はあまり支持されていないことがわかる。

次に、表1でNS学生10人の評価とNNS学生16人の評価の平均を比べてみると、全体的にはNNS学生の評定平均の方が高いことがわかる。その中で、逆にNS学生の評価の方が高いものは、「3. 学習者の意欲を持続させること」「5. その国の文化も教えること」「6. 外国語を学ぶことで自国の文化をふり返る」と「10. 学習者が興味を持っている内容を取り入れる」であった。

調査1の質問項目のうち、1, 2, 4, 7, 8, 11, 12, 15, 18は、語学教育においては言葉のしくみや正確さ、多くの知識を与えることが大切

だと考える傾向を示しており、「教育とは知識を与えることである」という伝統的な考え方に基づいていると言える。それに対して、3, 5, 6, 9, 10, 13, 14, 16, 17は、言葉の持つ文化的要素を重視し、学習そのものを楽しんだり満足感を持ったりすることが学習者の自律的学習にとって大切だと考える傾向、比較的新しい考え方に基づいていると思われる。これらの2つの傾向に分けて、今回の調査1の結果を評価の高い順にまとめると、表2のようになる。

表2. 新旧2つの傾向からみた調査1の結果

		26人全体の平均	NS10人の平均		NNS16人の平均
教育＝知識を与えること、という伝統的な考え方の傾向					
11	教科書や教材	3.92	3.7	<	4.06
18	たくさん読む書く	3.69	3.1	<	4.06
4	文法説明	3.62	3.3	<	3.81
7	正確さ	3.54	3.2	<	3.75
1	誤りはすぐ直す	3.5	3.1	<	3.75
2	正しい発音	3.27	3	<	3.44
15	知識を与える	3.13	2.95	<	3.25
8	文法の学習	2.87	2.55	<	3.06
12	教科書の全て	2.56	2.25	<	2.75
文化的要素、学習を楽しむこと、自律性を重視する傾向					
3	学習者の意欲	4.46	4.7	>	4.31
5	その国の文化	4.42	4.5	>	4.38
9	人と練習する機会	4.4	4.25	<	4.5
6	自分の文化	4.38	4.7	>	4.19
13	ユーモア	4.15	4.1	<	4.19
10	興味のある内容	4.1	4.15	>	4.06
16	楽しく	4.06	3.95	<	4.13
17	達成感の確認	3.9	3.55	<	4.13
14	はげます	3.79	3.45	<	4
平均		3.76	3.58		3.88

表2から、全体的には、「教育＝知識を与えること」と考えるような伝統的な考え方の傾向は弱く、語学学習を異文化接触の活動と捉え、学習のプロセスを楽しんだり、学生による自律的学習の促進を重視したりする新しい傾向が強まっていることが見てとれる。

しかし、NNSの中には、伝統的な傾向についても、「11.教科書や教材は外国語の授業に必要だ」や「18.外国語学習では、たくさん読ませたり書かせたりすることが必要だ」の評価が高かった。日本にあって、教室外にも日本語を使用する機会が溢れているような言語環境にいるNS学生とは異なり、NNS学生にとっては、自国の日本語学習環境を考えたとき、自然とそのような伝統的な傾向も支持されているのだと思われる。文法説明や正確さ、誤りの訂正などに対する評価がNSと比べて高いのもうなづけよう。あるいは、NNS学生の場合は、自分自身が受けて来た語学教育における教授観や教師像の影響も否定できないと思われる。同時に、新しい傾向は、NNS学生の評価が全項目で4以上となっていることから、かなり支持されていることがわかる。

NS学生では、3、5、6、10でNNS学生の評定を上回る平均値が出ている。一方で、「ユーモア」「楽しく」「達成感の確認」「励まし」については、NNS学生の方がNS学生より評価が高いのが特徴的である。NS学生の中には、学習というのは真面目に厳しく行うものという先入観があるのかもしれない。

ここで、表3を見てみよう。

表3は、NNS学生の中でも、日本と比較的語学教育観や教師の役割観が近いと思われる中国および台湾の学生7名の傾向をみるために、NS学生、中国人学生、その他のNNS学生という3グループに分け、調査1の結果を中国人学生の評定の高い順にまとめたものである。

表3をみると、伝統的な教育観、教師役割観の中では、「18.たくさん読ませたり書かせたりする」や「11.教科書や教材」に対する中国人NNS学生の評価が高いが、NS学生および他のNNS学生と比較して中

表3. 調査1の中国人学生の評価順結果

	NS10人の平均		中国7人の平均		他9人の平均	
教育＝知識を与えること、という伝統的な考え方の傾向						
18	たくさん読む書く	3.1	<	4	<	4.11
11	教科書や教材	3.7	<	3.86	<	4.22
4	文法説明	3.3	<	3.86	>	3.78
7	正確さ	3.2	<	3.43	<	4
1	誤りはすぐ直す	3.1	<	3.43	<	4
2	正しい発音	3	<	3.43	=	3.44
8	文法の学習	2.55	<	3	<	3.11
15	知識を与える	2.94	>	2.86	<	3.56
12	教科書の全て	2.25	<	2.57	<	2.89
文化的要素、学習を楽しむこと、自律性を重視する傾向						
5	その国の文化	4.5	<	4.71	>	4.11
3	学習者の意欲	4.7	>	4.57	>	4.11
9	人と練習する機会	4.25	<	4.57	>	4.44
6	自分の文化	4.7	>	4.57	>	3.89
13	ユーモア	4.1	<	4.29	>	4.11
10	興味のある内容	4.15	<	4.29	>	3.89
17	達成感の確認	3.55	<	4.29	>	4
14	はげます	3.45	<	4	=	4
16	楽しく	3.95	>	3.86	<	4.33
平均		3.76		3.58		3.88

国人 NNS 学生が最も高く評価していたものが「4. 文法説明」であることが興味深い。その他の項目については、むしろ中国以外の NNS 学生の方が高い評価を行っていた。

新しい教育観、教師役割観についての中国人 NNS 学生の評価は、「16. 楽しく」以外はすべて4以上であり、かなり高いと言える。特に、「5. その国の文化も教える」「9. その国の人と練習する機会」「10. 学習者の興味のある内容」「13. ユーモア」「17. 達成感の確認」については、NS 学生よりも評価が高く、今回の調査対象グループの中で最も高い評価をし

ていることがわかった。

それに対して、「3. 学習者の意欲を持続させること」と「6. 外国語を学ぶことで自国の文化をふり返ることができる」については、NS 学生が最も高い評価をしていた。また、「16. 外国語学習は楽しくなくてはならない」は、中国以外の NNS 学生に最も高く評価されていることがわかった。「14. 励ますことの必要性」は、中国人学生とその他の NNS 学生によって同程度に高く評価されている。

4. ネイティブ教師、ノンネイティブ教師の役割観調査

同じ授業の大学院生を対象に、調査2として「日本語教育において、ネイティブ教師のよいところと、ノンネイティブ教師のよいところを挙げてください。」という自由記述の課題を与えた。学生たちが書いたネイティブ教師のよいところと、ノンネイティブ教師のよいところを、大きく(1)日本語の知識・能力、(2)教え方、指導法、(3)日本語の使用、(4)社会文化的な側面、という4つの観点から分類し、表にまとめたものが、表4、表5、表6、表7である。文末の数字は、同じような内容の記述があった数を表している。

まず表4は、教師が持っている知識・能力について記述されたもので、①音声面、②文法面、③文字表記、④その他の4つに下位分類した。ネイティブ教師の長所として最も多くの記述が見られたのは、①音声面で、「発音が正確／正しい発音やアクセントができる」というもので、「自然な発音ができる／わかる」と合わせると18名に及ぶ。特に NNS 学生からの指摘が多く、NNS 学生の発音に対するコンプレックスを表しているとも考えられる。その一方で、NNS 学生からは「日本語の発音の難しい点がある」「自分が発音できれば、学習者にも説明できる」といった、NNS 教師の学習者としての経験を生かせるという長所についての言及も見られた。

表4. 調査2：ネイティブ・ノンネイティブ教師のいいところ(1)(28名)

	ネイティブ日本語教師のいいところ	ノンネイティブ日本語教師のいいところ
1	日本語の知識・能力について	
	①音声面 発音が正確／正しい発音やアクセントができる 16 自然な発音ができる、わかる。2 学習者のよい手本・模範となれる。2 日本語らしい発音ができる。	日本語の発音の難しい点がわかる。3 自分が発音できれば、学習者にも説明できる。
	②文法面 学生の誤りを指摘し、正しい文が提示できる。5 新しい文法にも対応できる。 正しい日本語が教えられる。2 日本語の正確さが信頼できる。 日本語の正しさに自信が持てる。 例文をすぐに、たくさん提示できる。2 学習者の間違いをすぐに直せる。 ネイティブなら絶対に間違った日本語をしゃべらない。	母語と日本語の相違点がわかる。 学習者のよく間違える所、理由などがわかる。3 母語で細かい／詳しい文法説明ができる。2 二つの言語の特徴を比較して分析できる。3 自分の学習経験から文法知識が整理されているはずである。 自分も学習してきたので、文法の違いがよくわかる。2 他の言語から見た日本語の特徴がわかる。3 文法を学習者にわかりやすく説明できる。 学習者にとって難しい点がある。2
	③文字表記 作文の間違いや誤りなどを正しく直せる。2 整った文字の形(特に漢字)を見せられる。	
	④その他 膨大な日本語表現の字引を自身の中に持っている。 母語である日本語の発音、会話、漢字などをよく知っている。 言葉を忘れたり、足りなかったりすることがあまりない。 語彙や表現の量が豊富である。2	学習者の言いたいことを的確な日本語に直せる。

文法面については、調査1の教師役割観のところで文法を教えること、文法学習の重要性がそれほど評価されていなかったことによるものか、発音の場合ほど意見が集中することはなかった。正確な文法を教えることよりも、母語との違いを意識させたり、学習者にとって難しいところ

が説明できるなどの点で、ノンネイティブ教師への期待が多く寄せられていた。

表5は、日本語の教え方、指導法に関すると思われる記述をまとめたものである。

表5. 調査2：ネイティブ・ノンネイティブ教師のいいところ(2)(28名)

	ネイティブ日本語教師のいいところ	ノンネイティブ日本語教師のいいところ
2	教え方・指導法について	
	微妙なニュアンスが教えられる。 日本語の知識が広いため、より深く説明できる。 直接法で教えられる。 中級・上級の学習者のために日本語だけで授業ができる。3 作文指導がしやすい。 会話の指導がしやすい。 発音指導／発音の練習ができる 2	学習者の母語や学習観、価値観などを分かった上で指導できる。 母語を媒介として、直接に指導できる。17 学生は母語で質問できるので、はっきりと聞ける。 自分の日本語学習経験から学習者の心理が理解できる。10 自分の学習経験を生かした教え方ができる。12 学習者に合った教材や教案などが作れる。 常に勉強し、努力すると思う。 ノンネイティブは学生の勉強する意欲を刺激する。 自分の学習体験などにより学習者の興味を引き出せる。 学習者の目線に立った授業・説明ができる。2 日本語学習のコツが教えられる。 学習者と言語学習観に近い。3

ここでは、NS 学生からも、NNS 学生からも、「母語を媒介として直接に指導できる (17名)」, 「自分の学習経験を生かした教え方ができる (12名)」, 「自分の学習経験から学習者の心理が理解できる (10名)」などの指摘が数多く寄せられた。従来の日本語教師養成プログラムや日本語教育研究で直接法、オーディオリンガル法、コミュニカティブ・アプローチなどといった教授法が取り上げられる場合、その多くはネイティブ教師のみを想定していると思われるが、NNS 学生にとっては、自分の学習経験を生かした教え方、指導法に価値を見出し、模索したいという希望があるのではないだろうか。ここに新たな教授法研究の余地がある

表6. 調査2：ネイティブ・ノンネイティブ教師のいいところ(3)(28名)

	ネイティブ日本語教師のいいところ	ノンネイティブ日本語教師のいいところ
3	日本語の使用について	
	①自然さ・言語的直感	②困難点への気づき
	<p>文法的に正しくも言えないもの、自然さの判断ができる。2</p> <p>日本人の視座、文化に基盤を置いた日本文(日本語らしい文)が産出できる。</p> <p>自然な日本語が使える。／教えられる。4</p> <p>直感で違いがわかる。</p> <p>言語的直感(内省／勘)が働く。3</p> <p>日本語でその表現を使うか、使わないかの判断が直感的にできる。</p> <p>母語話者は、直感的に非文かどうかを判断できる。</p> <p>日本語のニュアンスがわかる。2</p> <p>生の日本語・生きた日本語を聞かせることができる。3</p> <p>言葉の感覚、自然さがある。</p>	<p>日本語を外国語として客観的に見ることができ、母語話者には感じられないことを感じるができる。</p> <p>学習者にとって学習しにくい所、つまづきやすい所がわかる。9</p> <p>学習上の困難点、問題点、つまづくポイントなどがわかる。5</p> <p>学習者の誤用の原因がわかる。</p>
	③使用の機会	④共通語／共生語としての日本語の使用
	<p>学生と日本語でコミュニケーションできる。</p> <p>学生は先生と話すことで会話の練習ができる。2</p> <p>実際に日本語を使用する機会を自然に提供できる。3</p> <p>日本語らしい日本語を提供する人的リソースになり得る。</p> <p>日本社会にネットワークを持っている。</p> <p>いろいろな日本人を紹介できる。</p>	<p>外国人でも日本語が使えるという手本になれる。</p> <p>ネイティブと話すより緊張しない。安心感がある。</p>
	⑤その他	⑤その他
	<p>日本で生まれて育ったため、説明に説得力がある。</p> <p>ネイティブは学生の模範になれると思う。</p> <p>ネイティブだから、説得力(信頼・権威)がある。4</p>	<p>学習者の気持ち共感できる。</p> <p>ネイティブよりその言語が本当に好きであるはず。</p>

のではないかと思われる。

表6は、日本語の使用に関する記述をまとめたものである。ネイティブ教師の長所としては、日本語の①自然さ、言語的直感、および③使用の機会を提供できることに多くの記述が見られた。一方、ノンネイティブ

表 7. 調査 2 : ネイティブ・ノンネイティブ教師のいいところ (4) (28名)

	ネイティブ日本語教師のいいところ	ノンネイティブ日本語教師のいいところ
4	社会文化的な側面について	
	①日本の社会・文化などに詳しい	②2つの文化を客観的に比較／異文化理解を促す
	<p>日本文化、習慣、日本人の価値観などについて知識がある。8</p> <p>日本国内の場合限定だが、日本での生活の手助けとなるような指導ができる。</p> <p>言葉、文化だけでなくしぐさなどの非言語行動も教えられる。</p> <p>日本人と学習者の間に入り、架け橋的役割を果たせる。</p> <p>日本の生活について情報量が多く、アドバイスができる。</p> <p>学生は教師と話しながら、その文化に直接触れられる。2</p> <p>教科書が時代遅れになっても、最新の日本のことを教えられる。</p> <p>日本人の価値観、ものの考え方が教えられる。</p> <p>日本事情(文化・習慣・時事)を詳しく説明できる。7</p> <p>実際に使われる言語行動や場面などを提示・説明できる。3</p> <p>歴史的な日本語の変遷や世代による言葉遣いの差なども知っている。2</p> <p>新しい日本語を知っている。</p> <p>日本のマナー(失礼な言い方ではないか)について知っている。</p>	<p>母語、母文化との比較を通して教えることができる。2</p> <p>自国の文化と日本の文化の両方を知っているので比較できる。2</p> <p>文化や習慣の違いを客観的に観察・比較できる。3</p> <p>学習者と同じ立場に立って文化や考え方の違いを論じられる。</p> <p>抽象的な説明やこみいった説明なども母語ならできる。</p> <p>文化の違いなどをネイティブが言うより、ノンネイティブが言う方が受け入れられやすそう。(特に摩擦が生じやすい言語行動など)</p> <p>日本語を「外国語」として見ることで、日本人が気づかない現象に注目できる。</p>

ブ教師には、②学習者の困難点への気づき、④共通語、共生語としての日本語の使用という観点からの記述が見られた。またその他として、「ネイティブよりその言語が本当に好きであるはず」というコメントがあり、語学学習における情意的な側面の効果を考える上で興味深かった。

表 7 は、社会文化的な側面についての記述をまとめたものである。

ネイティブ教師の長所としては、「日本の社会、文化などに詳しいこと」、ノンネイティブ教師の長所としては、「2つの文化を客観的に比較／異文化理解を促すこと」とまとめることができるのではないだろうか。このような社会文化的な側面について、どのようなことを取り上げ、

どのように言語学習に生かしていくのかがどちらの立場からも教師養成において今後重要な課題となると思われる。

5. まとめと今後の課題

大学院の授業の中で行った、日本語教育観および教師役割観に関する調査の結果を題材に、ネイティブ（NS）の学生とノンネイティブ（NNS）の学生の間にはどのような意識の違いがあるのかについて考察してきた。また、将来彼らが日本語教師となることを考え、日本語教育におけるネイティブ教師、ノンネイティブ教師の役割について考えさせる課題を与え、その調査結果について概観した。大学院における日本語教師養成において、もはや日本人ネイティブの教師だけを考える時代ではないにもかかわらず、現在まで、積極的に両者の違いを念頭においた教師養成や教授法研究を行った例は多くないと思われる。今回の調査では、まだ調査対象の人数が少ないため、統計的処理などは行わず、大まかな傾向をみるに留まったが、以下の点が課題となろう。

- (1) 日本語教育現場における、ネイティブ教師とノンネイティブ教師の役割観について、さらに授業のスタイルやコミュニケーションの方法、目標言語以外の言語による説明の是非など、追求すべき質問項目を増やして調査を行い、考察を深める。
- (2) 當作（2003）などを参考に、世界の日本語教育現場において教師に求められている役割をさらに探り、そのような教師を提供できるような教師養成のあり方を考える。
- (3) ノンネイティブ教師について、自分の学習経験を積極的に教え方や指導法に生かせる方法を模索し、大学院での教師養成課程に取り入れる方法を提案する。

これらのことは、今後、国際日本研究専攻（博士課程後期）の日本研究基盤領域において、そこで行われる高度職業人としての日本語教師養

成において提供されるべき知識や知見，教育目標などを精査する上で重要な問題提起となるのではないだろうか。

注

- (1) 実際には，2008年度の国際地域研究専攻日本語教育研究コースの「日本語教育特講Ⅱ」の受講者は，NS 5名，NNS 5名の計10名であった。しかし，そのうち2名はこの調査1の実施時にクラスを欠席していたため，調査1のデータは8名分となっている。
- (2) これらの質問項目は，国際交流基金（2006）『日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房の p. 17 にある「教授観アンケート」による。

参考文献

- 岡崎眸（2005）「多言語・多文化共生時代の日本語教育」鎌田修ほか編『言語教育の新展開 —牧野成一教授古稀記念論集』ひつじ書房，367-382.
- カイザーシュテファン（1995）「ノンネイティブ日本語教師の役割 —異文化間教育の現場としての日本語教室を目指して—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10号，95-106.
- 才田いずみ（2007）「実習生の授業イメージと教師役割観」藤原雅憲ほか編『大学における日本語教育の構築と展開 —大坪一夫教授古稀記念論文集』ひつじ書房，199-219.
- 全国日本語教師養成協議会（2009）『全養協フォーラム：日本語教師，日本語教育 第7回 ～日本語教師のやりがいと楽しさ～ —教室で求められる日本語教育能力とは何か？— 実施報告書』報告集9
- 當作靖彦（2003）「アメリカにおける教育改革と日本語教師の専門能力開発」當作靖彦編『日本語教師の専門能力開発—アメリカの現状と日本への提言』日本語教育学会，11-39.

堀恵子（2007）「日本語母語話者と非母語話者とが共存する教育実習のあり方を探る—麗澤大学大学院における教育実習受講者に対する調査から—」藤原雅憲ほか編『大学における日本語教育の構築と展開—大坪一夫教授古稀記念論文集』ひつじ書房，221–241.

【キーワード】 日本語教師養成 ネイティブ ノンネイティブ
教師の役割観

Issues in Japanese Language Teachers' Training at the Graduate Level: Differences in View Between Native and Non-native Students Concerning the Teacher's Role

KANO Chieko

From the new viewpoint of post audio-lingual language pedagogy, education is defined by a focus on learner autonomy through interaction at the actual contact scene rather than by teacher-centered pedagogy. We are conducting a Japanese language teachers' training course at the graduate level of the university from this new point of view. The participants in this training course include not only Japanese native students but also many non-native foreign students as well. The author investigated the views of these students concerning the role of the teacher in Japanese language education, and considered what should be done in order to provide effective teachers' training at the graduate level.